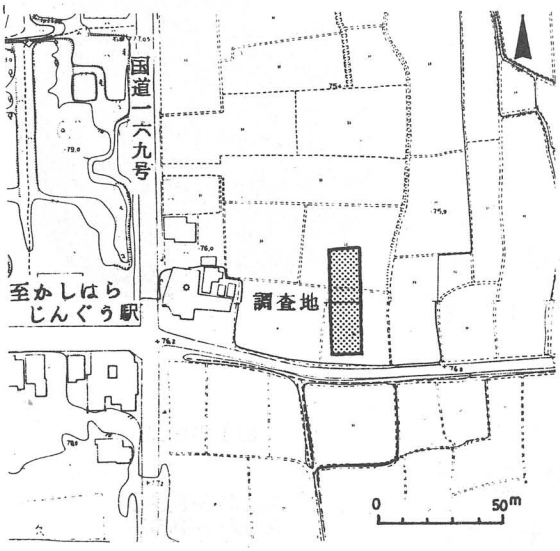
藤原京南西地区の調査

調査地は、近鉄橿原神宮駅前の東方200m、当駅東口より明日香村豊浦に通ずる県道のすぐ北側であって、推定藤原京の西南隅にあたる。周辺では、歴史時代の遺跡が数ケ所で知られている。調査地の東方100m、「下ツ道」に重なる国道169号線をへだてた地域では、掘立柱建物などが発見されており、廐坂宮跡と推定されている。この南方に隣接するところで、花崗岩礎石、瓦などが発見されている。また、調査地の南方約100mの地点で、平安時代の土器出土の報告がある。石川精舎跡あるいは廐坂寺跡かと推定されている石川町ウラン坊の礎石出土地は、東方約300mである。

旧地形を概観すると、調査地は、丈六台地と五条野台地との間に南から北へのびる幅狭い谷の出口近くであって、この谷の中でも最も低い部分にあたる。水田畦畔も乱れており、谷水を集める川（桜川？）が、かつてはこの附近を流れていたことが予測できた。

調査は、共同住宅建設予定地を中心に、南北長42m、東西幅11mのトレンチを設けて実施した。旧水田面下約1mで、南より北へ流れる旧河道を確認した。トレンチ内では岸を発見できず、深さは1m以上に及んでいる。堆積層は、砂と粘土が細かく互層をなしており、かなりの流水を物語っている。堆積層からは、各時期の遺物が無秩序に混在した状態で出土しているが、12・13世紀のものが主体をしめる。瓦器椀では、白石太一郎氏編年の第6



型式及び第7型式直前に相当するものが最も新しく、出土量も多い。したがって、この流路は、13世紀前半頃に形成されたものと推測できる。旧流路の堆積層上面で、土壙2ヶ所、小溝12条を検出した。小溝は、幅20㎝の浅いもので、南北・東西両方向があり、この地域が水田化したことを証拠づける。出土遺物からみて、水田化の時期は13世紀前半頃であろう。

以上のような状況からみて、藤原京に伴なう遺構はあっても流出したものと判断し調査を終了した。

遺物は主に旧流路の堆積層から出土しており、弥生式土器（後期）、土師器、須恵器（古墳時代～平安時代）、瓦器、施釉陶器、土馬、土錘、瓦、銅銭（隆平永宝1、富寿神宝1）などがある。多くは小破片であり、著しく磨滅している。ここでは、画像をえがいた土師器皿6点を紹介しておく。これらは旧流路堆積層中の小範囲から一括出土しており、いずれも完形ないし完形に復元できる。土師器皿は口径9.1～9.5㎝で、口縁部が小さく外反する。形態上二種に分類できる。aは、口縁部から底部へなだらかに移行し深さが1.8㎝前後のもの（①　④　⑤）であり、bは、口縁部と底部との境界が、わずかに屈折する深さ1.4㎝前後の浅い形態のもの（②　③　⑥）である。いずれも内面と口縁部外面とをヨコナ

出土の絵皿

左上から①②③
右上から④⑤⑥

デし、底部外面は指先でおさえつけたままである。皿の内面には人物座像を墨でかき、その右側に人物名を墨書している。①～⑤の底部外面には、表面画像の頭部にあたる位置に「上」の墨書がある。画像の概要と人物名の釈文は次のとおりである。

①烏帽子をかぶる男子像。墨書名「延末」

②頭髪をすりおろした僧形の男子像。墨書名「義明房」

③頭髪が逆立ち、上半身裸の男子像。左手で剣をささげもち、右手にも持物があるが何物かはわからない。墨書名「□□神王」

④女子像。墨書名「延末女」

⑤鼓を打つ様をえがく。墨書名「不知姓御子」

⑥墨書名「薬師」

⑤⑥は、④の例と表現が酷似しており、女子像であろう。これらの絵は稚拙ではあるが、手なれたえがき方であり、筆法も酷似している。年代については、土師器皿の特徴及び伴出瓦器から13世紀前半期のものとみられる。墨画、筆蹟の上からもこの年代には矛盾しない。絵皿の用途については、類例の検討をまって改めて論ずることにしたい。